

---

# きっとそれは嘘だから（仮題）

ぴざぽてと2号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きつとそれは嘘だから（仮題）

### 【Nコード】

N8702X

### 【作者名】

びぞぼてと2号

### 【あらすじ】

鬼畜シヨタがハーレムを作るよ！

流行りらしいから異世界転生させるよ！

というぽつと出のネタで書く、不純&見切り発車な初投稿です。下ネタ分が多くなると思われますので、そういうものが苦手な方はそつと戻っていただけるとありがたいです。

この作品はフィクションです。作品内に登場する名前、国名、地名等々は実在のものとなんの関わりもありません。

なお、更新が止まった際は「作者が羞恥に耐えられなくなった」と思ってください。

いつの間にか死んでいた平坂薫が、リュカ・L・グレーネスとして転生したとき、最初に考えたのは「この性欲をどうしようか」というひどく下卑たものだった。

生まれたばかりの彼は、年若い乳母に抱きしめられていたが、その胸が当たっているのだ。精神的には24才の一般的な成人男性の彼とすれば、これは拷問だ。

目の前に魅力的な双丘があるにもかかわらず、赤ちゃんなので触ることができない。普通のサラリーマンとして働いていた頃なら、性的に興奮すれば発生していた生理現象も起きない。

リュカは自分の股間を恨めしげに睨んだ。それはどうやら乳母には赤ん坊がぐずっていると見えたようで、よしよしとあやされる。

その拍子に、より強く押し当てられる胸。

これからそれこそ十年位、こういう生殺しの状況が続くわけか……。自分で慰めることもできず。耐えられるかね？

出た答えは強い否定。

彼は自分があまり人として上等な人物でないと思っていた。

権力を握れば増長し、金を持って増長する、そういう人間である、と。

そして、彼は自分のそんな性分を変える気がなかった。

だから彼はほくそ笑む。

前世での知識を使えば、うまくやれる。それこそ、ハーレムと  
かも作れるかな。

転生してすぐに、グレーネス家は裕福な家のようにだと気づいた。

リュカには専門のメイドが何人もつき、毎日朝から晩までつきつきりで世話をされる。まだあまり動けないために周りの様子をうかがい知ることが難しいが、それでもリュカの住む部屋が非常に広く、調度品も格調高いものだと分かった。

好都合だ。金があれば、多少の無理は通る。

リュカは金に物言わせて弱者を虐げる自分を想像してすこし笑った。

そんなリュカを見たメイドの一人が微笑んだ。どうやらリュカがほくそ笑むさまははたから見ると赤ん坊がキャツキャと無邪気に笑っているようにみえるらしい。

「リュカ様、

。、。。

」

メイドがなにか言っていてリュカを抱きあげる。リュカ様しか聞き取れなかったが、言語の違いは仕方ない。

言語どころか、世界が違う。前の「平坂として生きてきた世界」には、このメイドのように耳の尖った浅黒い肌の種族は存在しなかったのだから。

「

」

彼女は大切そうにリュカを抱き寄せると、メイド服の前をはだけて乳房をあらわにした。

リュカは彼女の形のいい乳房を口に含み、母乳を飲む。赤ん坊としては至極まっとうな行為にも関わらず、精神年齢24のリュカとしては釈然としない。

まあ、仕方ないか。

体が弱くては、出来ることもできない。そう割り切ることにしたリュカだった。そういうことができるようになるまで、時間は嫌というほどある。

それまで、何か別のことにうちこむのも悪くはないかもしれない。

授乳をされたまま、リュカは今日何度目ともしれない眠りに落ちた。

世の中でうまく立ち回るために、情報収集はかせない。

そんな信条と、ハーレムを作りあげるまでの手慰みを探すために、リユカは言語の分からないなりにメイドたちの世間話に耳を傾けた。

最初こそ自分の名前であるリユカ位しかわからなかったものの、二日、三日、一週間、そして一ヶ月と聞いているうちに、だんだんと彼女たちの会話を理解できるようになってきた。時間はたっぷりあったので一ヶ月ただ耳を済ますだけの生活も苦痛ではなかった。

メイド達の会話が正しければ、リユカの家、グレーネス家はこの世界のレティリシア王国という国の、ロークフィード地方を治める伯爵家のようだ。

レティリシア王国がどの大陸に位置する、などの情報は得られなかった。そもそも、異世界なのだからそういった概念がないのかもしれなかった。

父の名前は、ラファラン。母の名前はアデライト。三才年上の兄、ジルがあり、全員が色素の薄い肌、金髪、そして灰色の目をしているらしい。メイドの一人はリユカの家族のことを天使一族と呼んでいた。美形の多い一族らしい。

僕が薫だったときの世界での、フランス人名ばかり……。

何か共通点でもあるのだろうか。ただ、あったとしてもそれがリユカの「目的」にプラスになるとは思えなかったので「これはそう



いつものものだ」と納得させた。

リュカにとって大事なものは、自分が美形の多い、特権階級の家に生まれたということのみだ。

まるでそうしろと言わんばかりにお膳立てしてくれるじゃないか。

おまけに、伯爵としての責務を背負わなくてはならない長男ではなく、ある程度自由の利く次男。リュカにしてみれば欲を言えば三男が良かったのだが、そこまでの贅沢は言わないことにした。

文明レベルは、メイド達の会話を聞かなくても分かる。壁に立てられた蝋燭や、壁の彫刻から、中世ヨーロッパが近いだろうか。これも好都合だった。

あまり発達しすぎていても、その逆でも、ハーレムは作りにくいだろうし。

一つ驚いたことは、この世界には魔法が実在するらしい、ということだった。夜になると蝋燭がひとりでにつき、メイドが何か唱えるとミルクが人肌にまで温められる。そんな光景をリュカは何度か見た。

催眠だとか、拘束だとか、そういう魔法もあるのかな？ あんなら覚えておいて損はないよね。

そんなことをリュカが考えながらメイドたちが働いているのを見ていると、転生して最初に見た人であり乳をくれた人でもあるダークエルフのマイラが気づき、坊っちゃんはどうしたのかと首をかし

げた。

一瞬見透かされたように感じたものの、リュカは慌てず可愛らしい笑顔を返し、マイラの乳をせがむ。とっさに乳をせがんだのは、お腹がすいているのも確かにあったが、ほかの理由が大きかった。

「坊っちゃん。またですか？」

困ったように言いながらも、仕事だからか抵抗なく服をはだけるマイラ。健康的な黒い肌と銀色の透き通るような髪のコントラストに息を飲んだ。

「そんなにあげてると娘さんにあげるぶんがなくなっちゃうんじゃないですか？」

まだここに務めて日の浅いメイドが苦笑いをする。そう、母乳が出ることから良く考えれば当たり前なのだが、マイラには娘がいた。リュカより年は一つ上らしい。

マイラはリュカのハーレム計画のトップに名を連ねていたので、彼女が人妻だと知ったときは、美人な彼女を射止めた男を恨んだり嫉妬したが、今はもうそういう感情はない。

マイラの乳に吸い付きながら、リュカは喋ろうとしてみる。

「あら、どうしたの？」

結局はぶーとしか言えず、マイラが慈愛に満ちた顔で見つめてくる。リュカは相手に伝わらないことをいいことに、無邪気な笑顔で言う。

「親子丼が食べたいな、と言っただんですよ」

### 3 (後書き)

3 話目の時点で作者の羞恥耐性はもう……

親子丼に深い意味はありません

そういつことにしておいてくださいますか

会話を聞き取れるようになって、リュカは自分が失敗していたことに気づいた

メイド達の間で、「ぼっちゃまは泣いたことがない」と言われてしまっていたのだ。気味悪がられてはいなかったのが幸いだったが、なるべく目立ちたくないリュカにしてみれば、これは失敗だった。

リュカは機が熟すまで目立ちたくないのだ。たとえば、前世での知識を使えば簡単に富と名声が手に入るとしても。

もし、リュカが何も持っていない家庭に生まれたなら話が違ったかもしれないが、リュカは幸運にも伯爵家というある程度富も名声も転がり込んでくる家に生まれた。なら、焦る必要はない、と考えていた。

リュカは自分の知識を使えば、この世界の構造をひっくり返すことも可能だと思っている。だが、それまでだとも。世界を変えられなくても、美人とイチヤイチャできなければ意味がない。

翌日から、リュカは赤ん坊らしく振舞うようになり、メイド達の間で泣いたことがない、という話は出なくなった。

マイラに抱きかかえられてあやされるのは気持ちよかったが、それ以上に恥ずかしかったが。

この羞恥に耐えられるだろうか……。

排泄すらメイド達に見られてしまう状況に、さすがに不安になる。何年後か先、教育機関に通うのも不安の種だった。勉強のできる、できないではなく、同級生とまともに会話できるのか、という点で相手は自分を同格と見るだろう。しかし、精神年齢で言えば何回りも上なのだ。

少しばかり憂鬱になるリュカだった。

六年後、リュカの不安は的中した。

#### 4 (後書き)

この羞恥に耐えられるだろうか……。  
by 作者

「ただいま帰りました！」

グレーネス家の屋敷に、ダークエルフの、小さい女の子の声が響きわたった。

そろそろ帰ってくるだろうと玄関で待っていたメイド達が一斉に頭を下げる。

「お帰りなさいませ」

リュカは元気よく挨拶した女の子の後ろに隠れるようにしつつ、小さく「ただいま」と返した。

「リュカ君、もっとハキハキしてください」

途端に女の子にたしなめられ、しゅんとなる。

女の子の名前はクリスティアナ。マイラの娘で、母親同様、褐色の肌に長い銀髪を持つ少女だ。おそらく、十年後には絶世の美女として名を馳せるだろう。もちろんリュカのハーレム名簿に候補として載っている。

「強要はいけませんよ、クリス。リュカ様はおとなしい性格でらっしゃるのですから」

今度はマイラがクリスをたしなめる。マイラの存在に気づいて、リュカはマイラに抱きついた。あらあら、とメイド達が微笑む。



ちょうど会食に出かけるところだったリュカの両親も微笑ましくそれを見ていた。母親、アデライトが呟く。

「これじゃあ、どちらが母親か分からないわね」

「仕方がないさ。これも貴族に生まれたものの宿命だよ」

父親、ラファランがそんなアデライトを慰める。ラファランは背の高い、いかにも有能そうな渋い色男であり、アデライトは小柄でどこか儂げな印象のある美女である。

そしてどうやら、リュカは母親の血を色濃くついだらしく、同年代の子供と比べると小柄で、よく女の子に間違えられる。ちなみに、兄であるジルは父に似ている。

「それじゃ、行ってくるからな。クリス、今日もリュカと遊んでやってくれ」

ラファランがクリスにそう言い残し、二人は家の前に止まっていた馬車で出かけていった。メイド達とクリスが行ってらっしゃいませ、と一礼する。

「じゃ、リュカ君。部屋で遊ぼっか」

馬車が見えなくなると、クリスがリュカの手を引っ張ってリュカの部屋に連れていく。彼女は、両親が普段構ってやれないリュカがかわいそうだ、と遊び相手として任命されている。メイドとしての仕事は忙しく、夫も仕事で忙しいマイラが安心して仕事ができるように、という両親なりの配慮も多分に含まれている。

だから、遊び道具などもたくさんある。部屋の中にある遊具を見回して、クリスがリュカに聞いた。

「何で遊ぶ？」

「僕はなんでもいいよ」

大人しくリュカはクリスに従うつもりだった。

一日が終わり、ようやくリュカは一人きりになれた。思わずため息をつく。おとなしい外向きの顔をやめ、苦々しく舌打ちしてベッドに倒れ込んだ。気弱で頼りなく、女男とからかわれて涙目になる普通のリュカを見ている周りの人には想像できない姿だ。

同級生とまともに会話で来るか不安に感じてから早八年。結論として、リュカの不安は的中した。いわゆる前世での幼稚園、そして小学校に通い、今は小学三年生にあたる学年にいるが、正直苦痛となっている。

簡単すぎる授業内容、低レベルなことで盛り上がる同級生達、当然のことながら、リュカと話す際子供と話すように喋る大人達。それらはリュカをイライラさせた。

そのたびに、リュカの歪んだ欲望は膨張していく。

唯一、幼馴染であるクリスが純粹で汚れを知らない少女だというのが救いだった。おまけに、本人に自覚はないだろうが、リュカに

淡い恋心を抱いているのを知っている。そもそも、リュカがそんなように仕向けたのだ。いくら立派な両親に教育されたとはいえ、彼女はまだ幼すぎた。リュカがその心を掴むのにさほど時間は掛からなかった。

ただ、彼女を汚すのはリュカの肉体的にまだ無理だ。いつかそうする日を希望に、明日も頑張ろう、とリュカは深い眠りに落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8702x/>

---

きっとそれは嘘だから（仮題）

2011年10月26日06時12分発行